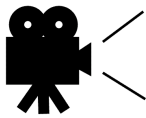


目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

この度の東日本大震災によって、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げますと共に、お亡くなりになられました皆様のご冥福をお祈り致します。

この会報は、当初、団体設立10周年を記念するおめでたい号となるはずでした。しかし、このようなごあいさつから始まることになろうとは、想像もしませんでした。幸いシティ・ライツの正会員、賛助会員の中で、被災地の東北にお住まいの方はいらっしゃいませんでしたが、東北出身の方は何人かいらして、ご家族やご親戚、ご友人が被災されたという方もいらっしゃいます。幸い、私の存知あげている限りでは、皆様無事だったようですが、そうではない方もいらっしゃるのかもしれないし、メーリングリストに登録されている600人以上の方々のお住まいまでは、把握しきれておりませんので、もしかしたら被災された方もいらっしゃるのかもしれないと思うと、とても心配ですが、とにかく皆様が無事であることを祈ることしかできません。関東でも、計画停電による交通渋滞にガソリン不足。放射能汚染の情報。水も牛乳も買えない物流麻痺。余震も続き、皆様、不安で落ち着かない日々をお過ごしのことと思います。

こんな時、シティ・ライツに何ができるのか？と考えておりました。そうしたら、新宿チームが勇気を出して、『英国王のスピーチ』のリベンジ鑑賞会を企画して下さいました。少しでも皆様に元気を出していただきたい、また、自分たちもこの企画によって元気を出して、被災地の復興を応援したいというあたたかい気持ちからだと思います。

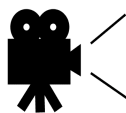
3月26日、岩手日報にも、こんな記事が出ていました。新聞の見出しは、『【宮古】シネマリーン再開「銀幕から元気を」』記事はこう伝えています。“宮古市小山田のマリンコープDORA内にある映画館「シネマリーン」は26日、震災以来半月ぶりに上映を再開する。「街に元気を子どもたちに夢を」を合言葉に、被災地に映画の灯をともし、震災当時、同館は映画の上映中。津波に警戒し来場者が館内で一夜を明かしたが、津波による浸水など直接の被害は免れた。25日は従業員が上映再開に向けてポスター掲示などの準備に追われた。復興を祈念し料金は通常より200～400円割り引く。櫛桁一則支配人は「県内の沿岸部では唯一の映画館。今の状況で気持ちを娯楽に傾けるのは難しいかもしれないが、子どもたちの疲れを取る役に立ちたい」と話す。”

最初に上映された作品は、『ドラえもん 新・のび太と鉄人兵団』と、『相棒 劇場版Ⅱ』だったそうです。

被災地の子供たちだけでなく、テレビをみている全国の子供たちにも、PTSDが発症しているという記事も読みました。PTSDとは、心的外傷後ストレス障害のことで、不慮の事故や災害など、思いがけない体験が心の傷となり、後にその記憶が様々なストレスとなり、不眠や不安、悪夢や恐怖、無気力感などの症状をもたらす心の病いのことだそうです。今回の東日本大震災でも、被災地の子どもたちをはじめ、テレビ画面を通じて被害の悲惨さを目にしている全国の子どもたちが、大きな恐怖を感じ、心のケアを必要としているそうです。震災後は、映画を観る余裕なんて当分訪れることもないだろうと思いましたし、民放で放送されはじめたお笑いやバラエティ番組は、「こんな時に不謹慎だ。」と批難を浴びたようですが、宮古市で上映された「ドラえもん」が、どんなに子供達に希望を与えたかしれません。今は、映画や笑いが、心のケアになる時なのかもしれません。

この記事を読むまでは、シティ・ライツにできることはない。と思っていましたが、できることは山ほどある！と思えるようになりました。それは、人々の心に希望の灯をともしべく、皆様に映画を観ていただく機会を作ることです。そして、被災地の復興を心から応援できる、希望を捨てない強い人間になれるよう、みんなと共に、私も映画を観たいと思います。

奇しくもシティ・ライツ設立10周年を迎えた今、映画には、人間を絶望の淵から立ち上がらせる大きな力があるということを、改めて知らされたような気がしています。そして、10年間この活動が続けてこれたことを誇りに思い、皆様に感謝したいと思います。



活動報告

～同行鑑賞作品～

このコーナーでは、近日(1～3月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・ロビンフッド 1月23日 (TOHOシネマズ有楽町)
- ・クレアモントホテル 1月31日 (岩波ホール)
- ・ハーモニー 心をつなぐ歌 2月11日 (川崎チネチッタ)
- ・洋菓子店コアンドル 2月26日 (ユナイテッドシネマとしまえん)



City Lights 設立10周年記念 第4回映画祭情報 実行委員長からのご挨拶とおまけ

「第4回CityLights映画祭～音声ガイド 紡いで10年 たくさんの出会いにありがとう」
最上級の心を込めて開催します！

3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震で亡くなられた皆様のご冥福をお祈り申し上げますと共に被災された皆様・関係者の皆様にお見舞い申し上げます。

今年の始めに発行した会報29号の中で今年の映画祭についてご案内したときには、まさかこのような事態が起きようとは想像もしていませんでした。関東に住んでいる私たちでさえ、地震から約20日を経過した今でも余震の不安や電力不足、原子力発電所の予断を許さぬ状況に心休まらない日々を過ごしているのですから、現地の方々のご苦労はそれはそれは大きなものと思います。

そのような中で、今年の映画祭を予定通り開催すべきかどうか、実行委員は真剣に話し合いました。資金の問題、先の見えない状況への不安などなど数え上げればきりがありません。けれども、こんなときだからこそ私たちらしい方法で前進しなければと決意を新たにしました。シティ・ライツは、映画の持つ力を信じそれを皆で共有することを目指して立ち上げた団体です。今こそその思いを一層強くして、映画祭を開催しなければ。それが10周年の今年の私たちに与えられた使命なのではないかと思えてなりません。

当日は元気に集えたことを共に喜び合い、映画からもらった力を形にして被災地の皆さんにお届けすべく、義援金の贈呈先も探して行こうと考えています。会員の皆様、どうかご協力宜しくお願いします。思い出に残る素敵な映画祭と一緒に実現しましょう！

以下に簡単にプログラムのご紹介をしておきます。



「100人の子供たちが列車を待っている」 NO.1

『100人の子供たちが列車を待っている』

製作国 チリ 上映時間 58分 ドキュメンタリー

映画とは無縁だった子どもたちが、映画の仕組みや面白さを伝えてくれる先生に導かれ、どんどんその魅力に引き込まれて行く様。その目を輝かせる様が素晴らしい一作。これぞ映画の原点です。上映後には日本映像翻訳アカデミー学長の新築直樹氏をお迎えしてのトークショーも行います。映画へのアクセスを可能にするという意味で、外国映画の字幕製作と音声ガイド製作には共通点もあるはず。そんなワクワクするような楽しいお話が聞けること請け合いです。

『蝶の舌』 製作国 スペイン 上映時間 95分。

2002年、シティ・ライツができた次の年、初めてみんなで観た外国映画です。作品の内容の素晴らしさはもちろんのこと、設立当時のまさに手探りの小さな小さな鑑賞会の思い出は、大切な歴史の一つです。

『大誘拐 RAINBOWKIDS』 製作国 日本 上映時間 120分。

故・岡本喜八監督の代表作のひとつ。日本アカデミー賞の監督賞・脚本賞を受賞しているばかりか、存在感たっぷりのおばあちゃん役・北林谷栄さんが最優秀主演女優賞を受賞した作品でもあります。テンポのよいサスペンス・コメディが、きっと皆さんのところに元気を届けてくれることでしょう。



続いて、当作品とかかわりが深い自分(よっしー)から『蝶の舌』についてのコメントを。ダンさんから『大誘拐RAINBOWKIDS』の見所についての熱いメッセージを掲載いたします、どうぞ！！



初めての外国映画鑑賞『蝶の舌』鑑賞会の思い出

『蝶の舌』の鑑賞会をしたのはシティ・ライツ1年目の2月だったと思います。自分(よっしー)がシネスイッチ銀座で見てきた感想をMLに書き込むと、それが外国映画だとは知らなかった視覚障がい者の若様から、「隣に座って耳元で解説するコソコソガイドがいいから映画館で観たい。」という声があがり、一端は「字幕版の外国映画だから、コソコソガイドじゃ無理だ」とあきらめかけたものの、自分ともつきいさんと視覚障がい者の若様の3人が中心となって、「字幕の朗読も同時に聴けるようにすれば、外国映画も観られるんだよね。どうしたらいいか考えて、鑑賞会をやってみよう！」と、思考錯誤のチャレンジ企画を行うことになり、新宿武蔵野館で、はじめての字幕版・外国映画の鑑賞会を行いました。

しかし、今は当たり前のように使われているFM送信機はまだなかったので、字幕を読む人も場面解説のガイドをする人も、一般のお客様と同じ、客席でしゃべらなければなりません。それで、声が聞こえて周りのお客様の迷惑にならないように、防塵マスクの裏に小型マイクを仕込み、そのマイクを録音機能付きのポータブルMDにつないで、録音待機状態にしておいて(これで録音してしまうと違法ですからね！)さらにヘッドホンアウトに分岐プラグをいくつもつなげて、イヤホンを片耳づつ共有してもらうという方式で、1回につき8人限定で、2回鑑賞会を行いました。



その時は、自分が字幕を読み、もつきいさんがガイドを担当しましたが、最初使った防塵マスクは、鼻まで覆うタイプだったので、マイクがもろに自分ともつきいさんの鼻息を拾ってしまい、しゃべっていない間もずっと、ダースベーダーのような鼻息が聞こえてくるという状態で、あまりうまくいかなかったので、2回目は、ビニール素材のシートを丸めて作った「消音筒」を使って大成功。これを機に字幕版の外国映画も観られるようになり、鑑賞作品が一気に広がりました。

10年目の映画祭で本作が上映されるとの事、運命的なものを感じます。素晴らしい作品ですので楽しんでいただけたとうれしいです。



『大誘拐』の見所はこれだ！

皆さん、こんにちわ。ダン@コタローデータバンクです。

今日は、シティ・ライツ映画祭で上映される作品『大誘拐 RAINBOWKIDS』のご紹介に参上しました。

実は映画祭の上映作品リクエストに、毎回この作品をあげていまして、今年ようやく念願かなって上映されることとなりました。

なぜ、それほどまでにこの作品にこだわるのか？

今から、その魅力をご紹介致しましょう。

★見所 その1

『ヒロインは、80歳のおばあちゃん！』

映画『大誘拐』の主演、大富豪・柳川とし子役を演じているのは、長年おばあちゃんを演じてきた“おばあちゃん女優”の第一人者。

昨年惜しくも亡くなった、北林谷榮(きたばやし たにえ)さんです。

『大誘拐』の公開当時、なんと80歳！しかもこの作品で、同年の日本アカデミー賞・最優秀主演女優賞を受賞しているのです！

ヒロイン・柳川とし子の人生最後の大勝負と、それまでのキャリアのすべてを注ぎ込んだ北林谷榮さんの女優魂がみごとにかさなり、円熟の域に達した素晴らしい演技が楽しめます。

また、周りをかためる俳優陣は、誘拐犯を追いつめる刑事役に、名優・緒形拳(おがた けん)さん。誘拐の協力者として巻き込まれる女性役に、樹木希林(きききりん)。柳川家の息子役に、岸部一徳(きしべい とく)さんといった忽々たる顔ぶれが揃っています。

まずは、北林谷榮さんを始めとする名優たちの、素晴らしい競演をお楽しみください。

★見所 その2

『原作は、天藤真(てんどう しん)の傑作推理小説！』

映画『大誘拐』の原作は、1979年に、第三十二回日本推理作家協会賞を受賞した天藤真(てんどう しん)による同名小説。

“誘拐ドラマ”といえば、黒澤明(くろさわあきら)監督の作品『天国と地獄』を代表とする、人質奪還のため犯人との電話での交渉などがみどころとなる作品が多いですね？

しかし『大誘拐』は、その常識を翻した、先を読ませない意表をついたストーリー展開が1番の魅力です。

ネタばれになるので、あまり内容は明かしたくないのですが、頼りない犯人グループに成り代わり、人質であるはずの80歳のおばあちゃんが犯人グループのリーダーになってしまうのです！

犯人グループが、要求するつもりの身代金は五千万円。

しかし、大富豪である人質のおばあちゃんは、これに激怒！

「わてを誰やと思うておるのや？

身代金は、百億！

びた一文まかりまへん！」

これには犯人グループの方がビビってしまう…。

そんな奇想天外な物語でありながら、同時に心温まるアットホームな要素も兼ね備えています。

ハラハラドキドキ、笑って笑って、ちょっとホロリとさせるという、まさに娯楽の王道的な展開。じつに楽しい、見終わった皆が笑顔になれる作品なのです。



☆見所 その3

『作品に込めた、監督のメッセージ』

『大誘拐』の演出は、鬼才・岡本喜八(おかもときはち)監督。

この岡本監督の作品にはすべて、一貫したテーマが込められています。

それは“戦争批判”というものの。

ある時は、ストレートに。ある時は、オブラートに包むようにさりげなく。

しかし、どの作品にも確実に、この“反戦メッセージ”が込められているのです。

というのも、岡本監督自身が、東宝に入社後に徴兵された経験があり、豊橋の予備士官学校在籍中に空襲に合い、多くの友人を失っているのだそうです。

『大誘拐』は、肩のこらない推理コメディですが、そんな作品の中にも、“戦争”というキーワードが自然な流れの中に出てきます。

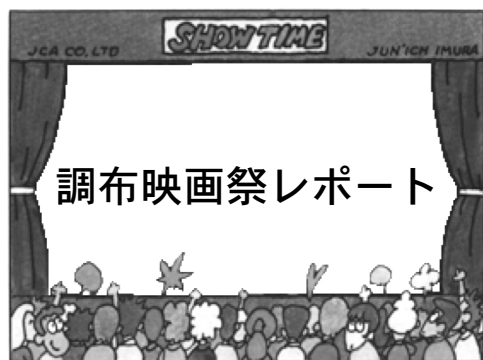
監督が、映画の中のどのあたりに、どんな形でこのキーワードを埋め込んであるのか？

それを見つけるのも、岡本作品を鑑賞するひとつの楽しみ方だと思います。

監督は、『大誘拐』を製作した当時、67歳。この作品で、日本アカデミー賞・最優秀監督賞、最優秀脚本賞を受賞しています。

まさに映画職人・岡本喜八の集大成と言って良い名作です。

老若男女を問わず楽しめる、極上のエンターテインメント『大誘拐 RAINBOWKIDS』。 皆さん、どうぞお楽しみに！



去る3月5、6日、今年も調布映画祭が行われました。

「オーケストラ！」のガイド製作にかかわった栗田佳奈子さんにコメントを頂きましたので、掲載いたします。どうぞ！！

私が初めてシティ・ライツの活動に参加したのは、2005年の第16回調布映画祭「シカゴ」のガイド制作でした。以来、ご縁のあるこの映画祭。今年はフランス製作の音楽映画「オーケストラ！」の班長を仰せ付けられました。

ガイド制作の募集には、音楽好きの方、フランス語を勉強中の方、遠く鳥取にお住まいの方など、この作品を是非やりたい！という熱い思いのメンバーが集まりました。また、制作開始直前には、横浜のシネマ・ジャック&ベティでライブガイド付き上映会が開かれ、その時のガイド原稿をお借りする事ができ、「これならバッチリだわ！」と楽観していたのが、大きな間違いでした。

ライブガイドは字幕版でしたが、映画祭では日本語吹き替え版を書き起こして収録します。セリフの量が倍以上に増え、ガイドを入れる尺がぐっと短くなるのです。セリフの情報が増えるので筋がわかりやすくなり、ガイドが不要になるという利点もありますが、場面や時代がくるくる変わることを説明する尺が足りません。そして、この映画の最大の見せ場、ラスト12分間に及ぶ演奏シーン。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲をバックに映し出される過去と現在の感動のドラマ！私は今でもこの曲を聴くと、映画を思い出して涙がこみ上げてくるほど、はまりました。これをどう伝えたらよいのか・・・。

また、今回は勉強会という形式ではなく、6名の参加者がメールで提出した原稿を私が監修していくという方法をとりました。検討会で1回だけ顔を合わせて直接やり取りした後は、メール上で意見交換を重ねます。メールでのやりとりにもどかしさを感じつつも、皆さんにアイデアを頂きながらなんとかまとめていきました。それぞれの思い入れのあるシーン、こだわりたい表情などなど、削っていくのが申し訳ない思いでした。でも、ガイドの目的は聞いてわかってもらうこと、楽しんでもらうことです。なるべく邪魔にならないよう、言葉を少なくしたいという共通認識のもと推敲を重ねました。

二人のモニターさんに励まされ、ガイドは出来上がりました。心地よいナレーション、セリフ収録チームの素晴らしい演技力と絶妙の編集によって完成した音声ガイドを、満員のグリーンホールで鑑賞できた事は、パリのシャトレ座での演奏に負けないくらいの感動でした。上映後に感想を寄せてくれた方々の温かいお言葉に、難しかったガイド制作の苦労も吹き飛びました。

また音声ガイド作りの仲間達と素敵な映画で「究極のハーモニー」を奏でられるのを楽しみにしています。

『オーケストラ!』（2009年 フランス映画 124分）

かつては一流オーケストラの天才指揮者だった中年清掃員が、急きょ出演できなくなった楽団の代わりに、昔の楽団仲間を集めてコンサートに出場しようと奮闘する感動作。寄せ集めオーケストラが巻き起こす奇跡を笑いと涙とともに描き出す。

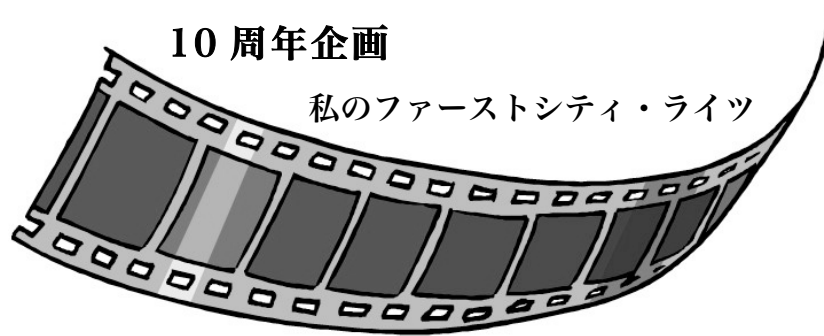
監督：ラデュ・ミヘイレアニュ

出演：アレクセイ・グシュコフ、メラニー・ロランほか



10 周年企画

私のファーストシティ・ライツ



しつこいようですが、この会報が届く4月には、団体設立10周年を迎えます。10周年企画として、古くから活動に携わっている方々に、シティ・ライツとの出会いを振り返っていただき、コメントを頂くことになりました。3名の方からのメッセージを掲載します。

（シティ・ライツ会員 まつだたかこ）

私がシティ・ライツに最初にアクセスしたのはちょうど、字幕翻訳の学校での1年間を終え、何か学校で習ったことを生かせることはないかと探していた2001年の秋ごろだったと思います。英語が分からない人に日本語で伝えることが字幕翻訳ならば、映像が見えない人に言葉で伝えるのも同じことだ！と思って、なんだか楽しそうと、ドキドキワクワクしました。

シティ・ライツもまだ立ち上がったばかりの団体でした。平塚さん（当時は稲葉さん）にメーリングリストに入れてもらい、「モンスターズ・インク」の同行鑑賞会で初めてシティ・ライツの実際の活動に参加しました。その辺の細かい思い出はここでは割愛しますが。

こそそガイドから送信機形式までの飛躍をみた時は、安定的に複数人に聞いてもらえるのでホッとしました。そこから映写室にお邪魔させてもらえるようになったり、どんどん環境は改善されていきました。

当時はもつきさんとリーダーが音声ガイドをなんとか手配していました。他のメンバーは、それをひたすら巢で口を開けて待っている小鳥たちという感じで、私自身、裏でどれだけ大変なことが起きているのかもよく分からず、開催日に出かけて行って、映画を楽しんで皆とおしゃべりをして帰って来るという感じでした。

ただ、視覚障碍の人が映画を観るとなったらこんなに大変なことが必要なのか、という印象を映画館関係者に与えてはいけないという思いが強かったので、こんなチャランポランな人でも気軽にやれるよ～、という雰囲気になればと考え、一念発起してガイドする！と立候補しました。

たしか、モリカナちゃんや福ちゃんと私が音声ガイドデビューする時は、2人の好きな「踊る大捜査線をやるね」と言っていたので、2人がサポートメンバーになって、ワーナー・マイカル・シネマズ 市川妙典で「踊る大捜査線」の同行鑑賞会を実施しました。鑑賞会の頻度も少ないうえに、人気作品だったから100名近い人が集まったんですよね。ガイドの結果は、、、いや～ホントお恥ずかしい結果でした。私はアクションものをやってはいけない、とあの時実感して以来、やってません。

まだ当時は視覚障害メンバーも熟練生(?)はあまりいなかったもので、音声ガイドをやる、というだけで感謝されてたから、余計に



いたたまれなかったですね。今は、ガイドやりたいという人も増えていて素晴らしいです。以前は、視覚障害のメンバーも映画に慣れてない部分がありつつ、その上に音声ガイドということで「どうでした？」と尋ねても、意見はほとんど出なかったですね。今は熟練生が沢山で、逆にこわいくらいですが、、

ともかく、私自身はもともと映画が大好きなうえに、解説を考えるために何度も何度も1つの映画を観るという、新しい映画鑑賞法に出会えてラッキー！この一言でした。そしてこの一言は今も変わりません。場を維持し続けているリーダーの苦労は計りしれません。でしゃばりの私のことも温かく見守ってくれ、育ててくれて、感謝しきれないほどです。

最近あまり同行鑑賞会に行けていないのですが、メーリングリストで鑑賞会の様子がアップされると、自分も参加した気分になれるし、そういう楽しみ方ができるのも変わらない良さだと思います。

気がついたら、随分と古株になってしまったのですが、顔を出した時には温かく迎え入れてください！今後ともよろしくお願いいたします。



City Lights 2001年～2002年の頃

・・・「ライフ・イズ・ビューティフル」と「風と共に去りぬ」の思い出・・・

(シティ・ライツ会員 石川 嗣郎)

私がCity Lightsに入会したのは2001年9月、定年退職直後でした。まずCLCに入会。そこで先ず見かけた「ライフ・イズ・ビューティフル」についての質問と回答がスタートでした。

[CLC:0699] ライフ・イズ・ビューティフルについて(質問)

私は全盲ですが、この映画を観終わった後、とてもいい映画だと感じました。

ただ、音声だけで観賞した際、自分なりに「おそらく映像はこうなっているだろう」と想像はしてみたものの、本当にそれで合っているのか不安で、夜もすやすや眠れません。



[CLC:0702] 質問にお答えします。(長文の一部)

こんばんは。稲葉(現在平塚)です。Hさん、ありがとうございます。

今音声ガイド作りで、非常に悩んでいるので、質問の気になる部分というのが大変参考になります。更に私たちが入れた音声ガイドを評価していただけるとありがたいです。

(注: ライフ・イズ・ビューティフルの音声ガイド研究会はすでに6月からスタートしていた。)

(質問1. 2. 3. は省略)

質問4. グイドとジョズエはドイツ兵の目を盗んで放送室に入り込み、別の棟にいる母親のドーラに、

無事でいることを呼びかけるシーンがあります。その放送を聞いたドーラはどんな表情をし、どんなリアクションをしたのでしょうか。放送室に入る前のシーンで、女性収容人たちが、どんな作業をさせられているかが、映像で伝えられる。

ここのガイドはこうです。

- ・ 山積みの衣類。
- ・ 女性収容人はガス室に入れられた人々の衣類を仕分ける作業をしている。
- ・ ジョズエや叔父の衣類を手にする恐怖に怯えながら、胸をえぐられる思いで作業を続けるドーラ。

そして、放送室に入ってグイドとジョズエがマイクに向かって話しはじめるまでのシーンを挟み、ドーラの方へ映像が移る。

ドーラは作業をやめ、スピーカーの聞こえる出口の方に少し歩いていく。カメラはドーラをバックから捕らえ、

夕焼けの空にドーラの影が写され、それが正面からのアップの映像に変わる。

ドーラは筆舌に尽くし難い表情で「良かった、生きている、会いたい」という喜びと哀しみの入り交じった、泣く寸前の様子。

そよ風がそよぎ、襟がやわらかくひらひらと風を受けている。

さて、ここのガイドはこうしました。

♪音楽(穏やかな、やさしい音色)

- ・作業をとめ、スピーカーに耳を傾けるドーラ。
- ・夕焼け空。
- ・そよ風がドーラの襟にそよぐ。

NHKの副音声作家から人物の表情や感情の説明に、主観を入れてはいけないと聞き、私たちはドーラの表情は敢えて口にせず、想像にゆだねました。音楽が十分雰囲気を出しており、夕焼け空やそよ風がそよぐ、といった状況説明に留めました。

これが、想像重視と説明重視の分かれ目だと思います。特に重要なシーンでの表情は、簡単に言葉にすると、反って想像の邪魔をするように思ったからです。どう思われますか？

[CLC:0704] 解説にとっても感動！

疑問が解け、すっきりとしたHです。

メールを読みながら、映画のことを思い出し、また目頭が熱くなってしまいました。メールだけで泣けたのはこれが初めてです。…個人的にはこれ、いいと思います。主観ではなく、状況だけを伝えてもらったほうが逆に映画の世界に入り込めます。…

このメールから「ことば」と「想像」によって映画をたのしむ事のすごさを感じたのです。

10月には、翌年3月の調布映画祭で『風と共に去りぬ』のバリアフリー上映の企画をプロデュースするチャンスを獲得。セリフの書き起こしから始まり、音声ガイド制作、セリフ朗読のための総勢60人ほどの配役もオーディションで選び、10日もかけて録音収録、音声ガイドナレーションの収録、DAT20本もの編集作業、そして当日の会場誘導、上映という大変なプロジェクトに立ち会うことが出来ました。この時のリーダーの苦勞と工夫と粘り、そして感動を彼女が「障害者と共に創りあげた『バリアフリー映画上映』の感動」というタイトルの作文にまとめ、NHK障害福祉賞に応募！見事優秀賞だったのです。(是非、City Lightsの原点を読んで下さい。)

この2本の映画と、City Lightsの活動との出会いで映画を深く観る素晴らしさを知り、現役時代とは全く違う沢山の友人が与えられました。充実した10年でした。感謝。



『City Lights』設立へのプレリュード

(シティ・ライツ 副代表 めーたん こと 美月めぐみ)

10年以上前のお話です。

その日、私は友人数名と、トークパフォーマンスグループ「こうばこの会」内ユニット『ビューティームーン』の稽古のため、皆さんおなじみの東京都障害者福祉会館の1室に集っていました。

そこへ、熱い想いをいだいた男女二人が現れて、「チャップリンのサイレント映画『街の灯』の上映会を自主企画でやろうとしてるんですが、ヒロインが盲目であるということもあり、障害者、とりわけ視覚障害者の人たちと一緒に楽しめたらと思ひまして…」と話してくれました。

私はこの瞬間、この人たちがとても好ましい人たちだと直感的に思いました。だって、「視覚障害者の人たちに」じゃなくて「視覚障害者の人たちと」だったんですよ！意味はほとんど変わらないようですが、この「に」と「と」という二つの助詞の間には、大きなイメージの隔たりがあるんです。「に」の場合は距離感があって、柵の外から手を差し伸べられている感じがあるのに対し、「と」のほうは傍にふっと寄り添ってくれる感じがするんです。だからこそ、その場しのぎの独りよがりの親切心だけで突っ走ったりせず、「一緒に楽しむにはどうしたら良いか」というアドバイスを、視覚障害当事者である私たちに求めてきてくれたわけです。

私はとても嬉しくなって、稽古の後のご飯にもお二人をお誘いしちゃいました。もちろん、もっともっと私たちを取り巻く映画鑑賞の不自由さを含めて知ってほしいという想いもあったので、「断られたらどうしよう」という気後れを、自分の中でねじり倒して、思い切ってお誘いしたのでした。



すると嬉しいことに、お二人とも一緒にきてくれました。確か、今はもう無くなってしまった「カーサ田町店」だったか、その2階の中華レストランの「小吃坊(しょうちぼう)」だったか、どちらかでした。(覚えてますとも、小吃坊(しょうちぼう)です！ by リーダー)

そこで私が何を話したかというところ…。

「確かに、サイレント映画は役者さんの台詞がないので誰かに説明してもらわないと絶対楽しめないけれど、それ以前の問題として、一般の映画館で上映されている映画も、映像と音楽だけで進むようなところはお手上げなんです。だから、すごく面白そうだった映画でもテレビ放映されるまで待つしかないというのが実情なんです。特に私は、邦画より洋画が観たいほうなんです。映画館では吹き替え付きの上映はほとんどないので諦めるしかないんです。」

そんなお話を、延々訴えた覚えがあります。

このときに、私たちの話を「うん、うん」と魅力的なアルトの声でうなずきながら聞いてくれていたのが、現在の私たちのリーダー・平塚千穂子(当時は旧姓の稲葉)女史だったのです！

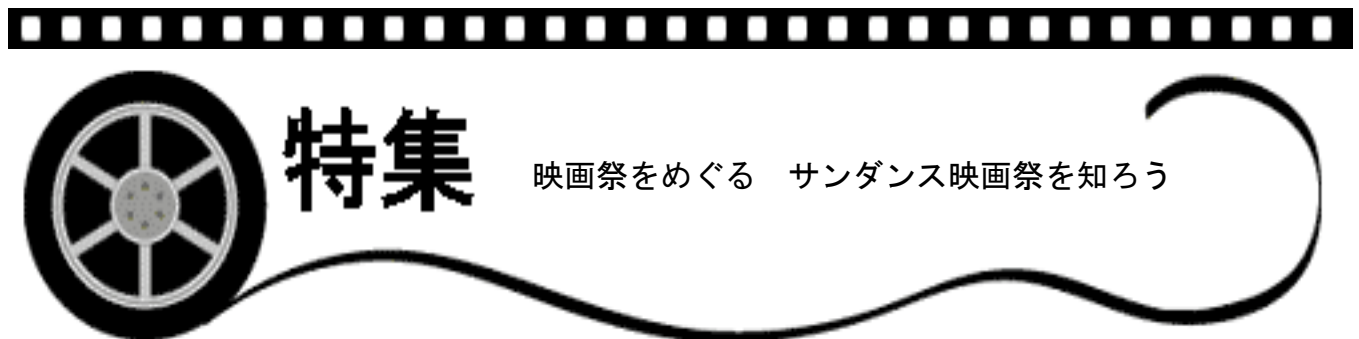
残念ながらこの「街の灯」の上映会は結局実現できないまま終わってしまったのですが、この出会いがきっかけでいろいろな想いを強く持ったリーダーは、バリアフリー映画鑑賞推進団体『City Lights』設立に向けて歩み出したのです。

それ以後の彼女の行動力は目覚しく、あっという間に団体を立ち上げ、その人柄の大きさ・優しさが吸引力となり、多くの会員を集めたばかりか、協力してくれる人物や団体をも惹きつけていきました。

この先の歴史はまた別な人が語ってくれることと思いますが、もし機会があれば、また私も当時の思い出の続きなど書かせていただきたいと思います。

最後に、平塚リーダーが立ち上げたこのシティ・ライツの活動を通して、私は多くの人々と共に、同じ空間で、同じタイミングで、笑い・涙・感動を共有できるようになったことに、とてもとても感謝しているんだということを、声を大にしてお伝えしたいと思います。

リーダー、そしてリーダーが最初に声をかけてくれたときの「視覚障害者の人たち“と”一緒に映画を楽しもう」という気持ちに賛同して集まってくれた多くの皆さんに、心からお礼を言わせてください。本当にありがとうございます！！そして、これからも末永く一緒に映画を楽しむ仲間としてお付き合いくださいませ！



あっという間に、5回目になりました。今回は知人ぞ知る、サンダンス映画祭を取り上げます。

映画ファンにとっては信頼度の高い映画祭です。

サンダンス映画祭は、アメリカの映画祭。ユタ州のスキーリゾート地で有名なパークシティで、1978年より毎年1月中旬から11日間に渡って開催されている。インディペンデント映画を対象とし、数万人規模の客を招き約200本もの長・短編映画が上映される。日本のNHKがスポンサーに名を連ねている。

名称は、この映画祭を主催するロバート・レッドフォードが映画『明日に向かって撃て！』で演じた役柄サンダンス・キッドに由来する。

【概要】1978年、映画製作者たちをユタ州に惹きつけるのを狙いとして、俳優・映画監督のロバート・レッドフォードが「ユタ・US映画祭」として始めた。当初のメイン・イベントは古い映画の回顧展で、映画製作者らによるディスカッションなどが行われた。しかし、当時すでにハリウッドの外で制作された映画群によるプログラムも含まれていた。ユタ州で開催するのは、レッドフォードがユタ州の住民であったためである。

サンダンス映画祭はロバート・ロドリゲス、クエンティン・タランティーノ、ジム・ジャームッシュなどの映画監督の知名度を上げた。
また『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』『セックスと嘘とビデオテープ』『ソウ』などのインディペンデント映画を有名にしている。

この映画祭が他を圧倒しているところは、観客に映像作家、俳優だけでなく、配給会社の買い付け担当、弁護士、エージェント、マネージャーなど、ビジネス関係者が圧倒的に多いのが特徴である。特に90年代半ばから、ネクタイ・スーツ姿の携帯電話を持ったいかにもと思われる輩が急増。第二・第三のタランティーノやロドリゲスと契約しに、この映画祭に現れ、ホテルロビーでは連日連夜、早朝まで買い付け担当や弁護士との会合が行われている。

2007年9月下旬に2008年開催分の締め切りがあったが、応募総数が史上最高の8,000本を越えた。

過去の受賞作品

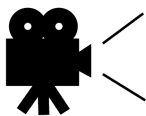
2000年 ガールファイト(カリン・クサマ監督)

1995年 マクマレン兄弟(エドワード・バーンズ監督)

1996年 ウェルカム・ドールハウス(トッド・ソロンズ監督)

2007年 さよなら。いつかわかること(ジェームズ・C・ストラウス監督)

2009年 プレシャス(リー・ダニエルズ監督)



お知らせ

■新規会員のご紹介

(2011年1月15日～2011年3月31日までにご入会いただいた方々です。)

〔正会員〕・仲田 愛(東京都北区在住)

■調布シネサロン

“永遠のマドンナ 吉永小百合特集”「伊豆の踊子」の音声ガイド付き上映を行います！

日時:6月21日(火曜日)

場所:調布市グリーンホール(京王線調布駅中央口よりすぐ)

上映開始:14:30～/19:00～ の2回。(音声ガイド付き)

※各回 30 分前開場

鑑賞料:無料

主催:調布市文化・コミュニティ振興財団 協力:シティ・ライツ

上映作品:『伊豆の踊子』(1963年/日活/87分)

これまでに幾度となく映画化されてきた川端康成の文芸「伊豆の踊子」を、吉永小百合と高橋英樹の共演で映画化した63年版。

大正時代の伊豆の天城街道を舞台に、旅芸人一座と道中を共にすることになった男・川島と若く美しい踊子・薫との淡い恋を描く。(「キネマ旬報社」データベースより)



※音声ガイドをお聞きになる方は、FM ラジオをご持参ください。

周波数 FM88.5MHz で音声ガイドをお聞きになれます。(当日受付にてラジオの貸出もあります。)

※いらっしゃる方は、シティ・ライツ事務局までご一報いただけると嬉しいです。

調布駅からの誘導をご希望の方も、駅からご案内いたしますので、ご連絡ください。

■鎌倉市川喜多映画記念館にて、『天国と地獄』の音声ガイド付き上映を行います！

昨年9月に実施した、鎌倉観光&映画企画の第2弾を行います。

日本の映画大使と言われた、川喜多長政・かしこご夫妻の旧宅跡に、昨年・春にオープンした「鎌倉市川喜多映画記念館」では、4月1日～6月26日までの期間中、“映画監督 黒澤明の世界”と題して、黒澤監督の特別展を行っています。

その最終日に、黒澤監督の代表作『天国と地獄』の上映に、音声ガイドを付けさせていただけることになりました。

記念館には、上映だけでなく、展示スペースもあり、この期間は、黒澤明監督の貴重な資料も観ることができます。

もちろん、前回同様、この展示資料についても、記念館スタッフによる丁寧な音声ガイドがつきます！！

旧川喜多邸には、アラン・ドロンや、フランソワ・トリュフォー監督のほか多くの映画人が訪れたと言われています。そんな素敵な場所で、音声ガイド付き上映が定期的に行われることになるなんて、川喜多夫妻もきっと、びっくりしながら、喜んで見守ってくれていることと思います。アジサイがとても綺麗なシーズンですので、また鎌倉観光もセットで楽しみながら、みんなで観に行きましょう！

※お申し込み方法などの詳細は、追って、メーリングリストでお知らせします。

■第4回 City Lights 映画祭のお申し込み受付開始！

来る、6月4日(土曜日)、両国の江戸東京博物館で、第4回 City Lights 映画祭を開催いたします。

今年は、シティ・ライツ設立 10 周年を記念して、これまで支えていただいた皆様に感謝をこめて。そして、東北地方大震災の被災地への復興支援を形にして、皆様に元気を取り戻していただけるよう、盛り上げていきたいと思っています。

早速ですが、お申し込み受付を開始したいと思います。当日の混乱をさけるため、チケットは昨年同様、事前購入システムとなりますので、ご来場を予定している方は、お早めにチケットのご購入をお願いいたします。締め切りは、5月25日までとなります。

ご入場の際には、必ず、ご購入いただいたチケットの呈示が必要となりますので、よろしくお願いいたします。

(※映画祭の内容詳細については、同封のチラシをお読みください。)

●チケットのご購入について

・郵便振替口座(ゆうちょ銀行)へのお振込によるチケットのご購入をご希望の方は、インターネット、メール、お電話のいずれかの方法で、お申し込み下さい。お申し込みを受け付け次第、払い込み方法とチケットの送付についてご連絡いたします。

□インターネットからの申し込み

<http://www.citylights01.org/eigasai/2011.html> のフォームに必要事項を記入してお申し込み下さい。

□メール・電話による申し込み

電話の方はシティ・ライツ事務局(03-3917-1995)まで、お電話でお申し込み下さい。

メールの方は、宛先 eigasai4@citylights01.org / 件名 第4回映画祭申し込み と書いて、

本文に下記の項目を明記の上、お申し込み下さい。

1.お名前／2.フリガナ／3.チケットの種類と枚数／4.チケットの送り先(ご住所)／5.電話番号／6.駅からの誘導希望の有無
(JR 両国駅 / 大江戸線両国駅のいずれか)

※ なお、チケットは、各作品 500円。3作品すべて鑑賞される方は、1400円の1日券をご購入下さい。

■2011年度総会 延期のお知らせ

まずは、震災の影響で、3月、4月の活動が中止・延期となってしまうことを、お詫び申し上げます。そのため、会計・事務作業にも遅れが出ております。また今年は City Lights 映画祭を6月4日に控えていることもあり、通常でしたら5月中に開催していた総会を、今年は7月以降に延期させていただきたいと思っています。昨年度の活動報告や決算。今年度の活動予定と予算についてのご報告も遅れてしまいますことを、ご了承ください。なお、2011年度の総会は、団体設立10周年記念パーティーとあわせて盛大な会となるよう、準備していきたいと思っています。日程・場所等の詳細が決まりましたら、改めてお知らせ致しますので、しばらくお待ちいただけますよう、お願い申し上げます。



編集後記

編集スタッフ・イラスト描きやレイアウトデザインの
スタッフ也大募集！希望の方は会報編集課まで！

（会報編集課 ノンちゃん）

2月のある日。「その街のこども 劇場版」という作品を観ました。これは昨年、阪神淡路大震災から15年ということでNHKドラマとして放送され、その後に新たに追加された場面を含めて今年公開されたものです。そのときの感想をこんなメモとして書いていました。このときはまるで他人事のようにだったことが、さらに自分の身により近いところでもっと大きなこととして起こるなどとは思っていませんでした。…、なんとも言えず信じられぬような心持で読み返しました。今から16年後、どんな風になっているのか？今はとても考えられないのですが、とにかく進んで行かなければならないのですよね。以下、メモの一部を載せておきます。

… 何気なく迎えるはずだった今日という日が、一瞬にしてまるで違うものへと変化してしまった事実。それは経験した人間、目の前で見た人間でないと本当には理解しえないことなのだと思うけれど、決して、だれもが忘れてはいけないことなんだという当たり前のことに気づかせてくれる作品だった。

（会報編集課 吉川）

2011. 3.11 東日本大震災が発生。これを書いているのは13日の日曜日なのですが、被害状況が気になって仕方がない。皆さんは大丈夫でしたか？自分は職場にいたのですが、ビルが大揺れで壁にヒビが入りました。10階から非常階段で近所の公園に非難。あまりのできごとに泣き出す社員もいました。

TVから流れる震源地の映像にびっくり。「被爆」、「M9」といった単語を耳にしてさらにびっくり。被災地のかたがたの安全を願ってやみません。11日は電車がストップしていたので人と車で大混雑の中、歩いて帰宅しました。まだ余震が続いていてとても怖いです。

ただ、今回のことで気づいたことがあります。

「地震はいつ来てもおかしくないんだということ」「絶対に安全なものなんてないのということ」

このことを強く意識して、生きていこうと思いました。

また、被害を抑えるべく奮闘する人たちや、支援をいただいた国々には、人間の強さと暖かさを感じました。友人の両親が仙台にいてることを知り、物資を持って仙台へ向かう彼に、思いを込めて物資を手渡しました。当面は、自分が出来ることをしたいと考えています。最後に、お届けするのが遅れてすみませんでした。年度末ということもあり、ばたばたしました。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は7月10日。投稿される方は、6月第2土曜日までにお願います。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2011年春 4月10日発行 編集：吉川俊平 斉藤恵子
発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

